

## 【研究ノート】

# ハズダとその否定について

Research on the Negative Forms of “hazuda”

張 昕  
ZHANG Xin

**要旨** モダリティ形式ハズダの文末用法についての研究はかなり進んでいるが、その否定について扱ったものは少ないようである。本稿では、肯定のハズダの意味・用法を整理し、それと対照させる形で、否定のハズガナイとハズデハナイの意味・用法を考察する。

考察の結果から見ると、ハズデハナイという形式は、形態上はハズダの否定形ではあるが、ハズデハナイという形で使われることは少なく、多くの場合、過去形のハズデハナカタという形で使われている。また、ハズデハナイは、「こんなはずでは（じゃ）ない」または念押しや確認を求めるような反語用法に限られており、一種の独立した形式と考えたほうがよい。一方、ハズガナイという形式はハズダとは形態上の対応を持っていないが、ハズダの用法とある程度の対応関係を持っている。この点から見ると、ハズガナイという形式は、意味・用法上ハズダの否定形として認められる。

## 0. はじめに

現代日本語のモダリティ形式ハズダには、それに対応する否定形としてハズガナイ<sup>1)</sup>とハズデハナイがある。よく知られているように、この二つの形式が表す意味は互いに異なっている。また、ハズダがいくつかの異なる用法を持つと同様、ハズガナイとハズデハナイにもいくつかの異なる用法が存在している。それでは、ハズガナイとハズデハナイの諸用法は、ハズダのすべての用法と対応するのか。一部の用法にのみ対応するのか。あるいは、肯定の時とは別の用法として考えるべきなのだろうか。本稿は、ハズダの意味・用法を整理した上で、それと対照させる形で、否定のハズガナイとハズデハナイを考察することを目的としている。

## 1. ハズダの意味・用法

ハズダの否定を分析する前、まず肯定のハズダの意味・用法を確認しておきたい。

<sup>1)</sup> ハズガナイという形の他に、ハズハナイ、ハズモナイという形式もよく見られる。例えば、下の三例は、類似した文脈で同じ動詞「ある」の意志形「あろう」に後接していることを見ていると、三形に差はなく、相互に入れ替えも可能と思われる。そのため、本稿では、ハズガナイの一種として扱うことにする。

- ・とはいえ、11 人もの家族を養っているパパに、カネなどあろうはずはない。（『誰も描けなかったピナたちの物語』）
- ・よって、胤度にはもはや子のあろうはずはない。（『南総里見八犬伝：現代語訳』）
- ・よくよく考えてみれば、このような、古埃を被った商店街に、デザイン用品を商う店など、あろうはずもない。（『白の鳥と黒の鳥』）

本稿では、太田（2008：145）<sup>2)</sup>の説にしたがい、ハズダの基本的意味を次のように規定する。

ハズダ：話し手の認識（論理や既存知識などを含む）で判断すると当然成り立つ命題を提示すること。

話し手が自分の認識をあえて現実の中に持ち出すのは、いかなる場合であるかを考え、その認識のあり方と現実のあり方との対応関係という観点から、ハズダが使用される文脈として次の三つの場合が考えられる。

- (1) 判断と現実が一致するかどうか確認されていない場合
- (2) 判断と現実が一致しない場合
- (3) 判断と現実が一致する場合

以下、この三つの場合におけるハズダの用法について考察していく。

### 1.1 現実が確認されていない場合

ハズダを現実となんらかの距離を持つ〈話し手の判断〉が示されるものとした場合、その典型的な使い方として、まず現実が分からないという状況がある。現実の状況が未確認である中で、「話し手の現在の認識で判断すると当然こうだ」と自らの考えを示すことは、基本的には「見込み」として働くことになる。このハズダは、ニチガイナイと置き換え可能なのに対して、それ以外のハズダはニチガイナイと置き換え不可能ということになる<sup>3)</sup>。

- (4) 十年以上も看護婦をしているから、人間社会の裏面はおおかたしりつくしているはずだ。  
(『洒落た関係』)
- (5) おれが学位をとれば、どんなに良い家からだって妻を迎えることができるはずだ。  
(『青春の蹉跎』)

実際の用例を見る限りでは、上のようにその場で推論を働かせる状況で使われるハズダはそれほど多くなく、むしろ次のように自らが持っている確信を主張していくようなものの方が多いようである。

- (6) 「…人間、草の根食ったって、ひと月やふた月は生きられるはずだ。」  
(『野火』)
  - (7) 正さんは、この日記を読みなさいと、私に手渡したわけではない。どんな人間の心のなかにも、人に知られたくない一面があるはずだ。  
(『道ありき』)
- また、次のような特殊な文脈では、ハズダはすでに決まっている予定や心づもりを表し、「～ことになっている」「～予定だ」の意味になる。
- (8) 「帰りの船もきめてしまった。あと百四十三日で神戸につくはずだ。」  
(『愛と死』)
  - (9) 十二時二十分。予定では、シンヤの乗った飛行機はすでに着陸しているはずだ。  
(『失はれる物語』)
  - (10) 東京駅の案内所で調べたとき、下関行き急行は、朝の四時過ぎ岩国へくつはずであっ

<sup>2)</sup> 詳しくは太田（2008）をご参照いただきたい。

<sup>3)</sup> ハズダとニチガイナイの置き換えについては、岡部（2003）が詳しい。

た。 (『播州平野』)

さらに、ハズダには話し手が既に知識や情報として獲得している事柄を取り出して提示する用法がある。これは当該の事柄の成立を話し手の記憶によって確認する表現で、話し手の記憶に間違いがなければその事柄が成立するということを表す。

- (11) 百坪ほどの敷地に建てられた、これとって特色のない家だった。通夜のときの記憶では、一階に十五畳のリビングがあって八畳の和室と接しているはずだ。

(『らせん』)

- (12) 最近は気象用語には「北東の風」と言うようになったが、もとは確かにそう言わなかったはずである。 (『英語研究者のために』)

- (13) 「夜分、お邪魔していました、山脇さん」主婦たちのリーダー格の女が言った。隣組の班長の家庭の主婦だ。山口松子という名だったはずだ。

(『ストックホルムの密使』)

## 1.2 現実の状況が確認済みで、現実と判断が一致しない場合

一方、現実の状況がすでに確認されている中で、ハズダが使われる場合もある。

- (14) (いつも成績がいい彼は不合格だったと聞いて) 彼の成績はもっといいはずだ<sup>4)</sup>。

この場合、「普段彼の成績はいい」という前提から、「今度の彼の成績もいい」という結論にたどり着く。ところが、実際の彼の成績はよくないから、予想と現実の間に食い違いが生じ、ここから「不審、不可解」のニュアンスが生じる。また、

- (15) もうそろそろバスが来るはずだが、遅いな。 (森田 1980 : 411)

- (16) 「あっ、さいふがない！たしか、ここにおいておいたはずだが…」

(『おめでとうがいっぱい』)

- (17) 昼間の記憶では、もっと傾斜がゆるやかだったはずだが、こうしてみると、ほとんど垂直にちかい。 (『砂の女』)

のように、ハズダは、「自分は当然こうであると考えているのに、現実の状況はそれに反している」というような文脈で使用されることも多い。特に、聞き手も当然それを知っているにもかかわらず、それと矛盾した言動をしているというような場合には、ハズダは、確認要求<sup>5)</sup>相当の機能を持ち、話し手と聞き手との認識のギャップを意識させる表現となる。

- (18) 「いい加減にしてくれ！これ以上話しかけるな！私を面倒に巻き込むのは、これがはじめてじゃないことは、君自身よく知っているはずだ。私は、自分自身のことで精いっぱいなんだ。子供に付き合っている暇なんかない！ (『ラストコンサート』)

- (19) もみ手して得意気に僕を見る紳士に横から、「お父さん、タバコをくれよ」と次男坊。「お父さんがタバコ屋じゃないくらい、おまえだって知っているはずだ。」

(『闖入者』)

- (20) 「昨日、大橋さんという人からまたお手紙がきていたわね。おまえは私と約束した

<sup>4)</sup> 森田 (1980) の用例を参考し、手直ししたものである。

<sup>5)</sup> 〈確認要求〉とは相手からの情報要求を表すもので、「相手に向かって差し出せば、相手の認識状況を相手に確認する (そして自らと同じ認識状況を確認する) ことになる」(森山他 2000 : 124) といったものである。

はずよ。あの人とのお付き合いはやめるはずだったでしょう。」（『青春の蹉跎』）

- (21) 「お前は何もできない。それはお前自身が一番良く知っているはずだ」タバコを口にくわえて、司はバカにしたように薄く笑う。（『薔薇の契約』）

### 1.3 現実の状況が確認済みで、現実と判断が一致する場合

現実が確認されていて、なおかつ判断がその現実と一致する場合でハズダが用いられるのは以下のような場合に限られる。

- (22) 娘の家で手料理をごちそうになっていたということなのだ。道理で、帰ってくるのが遅いはずだ。おかわりもしないはずだ。（『迷宮の記憶』）
- (23) その時間に突如覚醒したことを、話した。  
「そうだったのか。やっぱりなあ。道理で胸騒ぎがしたはずだ。電話をすればよかったね」（『犬と歩けば』）
- (24) 再び流れるような動きで材料を入れ、先刻と同じように美しい姿勢でシェーカーを振り始める。林道が思わず呟いた。「なるほど、女性に人気があるはずだ」  
林道の言葉に笑いながら、川本がカクテルグラスにギムレットを注ぐ。（『眠る体温』）

(22)の場合、「帰りが遅い」のはどうしてなのかという疑問にはじまり、その原因を捜し求めて—「娘の家で手料理をごちそうになっていた」という事実を知ることで、それなら「帰りが遅い」という現実も当然だと納得する、という思考過程を経ている。

また、現状に不審を感じている聞き手（読み手）に対して事情を解明する場合もある。

- (25) 「いやだったら。わあ、穢い」「そりゃ酒臭いはずだろ、だってそいつが二日酔の正体なんだから。」（『女たちよ！』）
- (26) 「ずいぶんお上手でいらっしゃいますのね。よっぽどお習いになりましたの？」  
「いいえ、わたくし、やる事はあの、前からやっておりますけれど、ちっとも上手になりませんのよ、不器用なものですから、……………」  
「あら、そんなことはありませんわ。ねえ浜さん、あんたどう思う？」  
「そりゃ巧いはずですよ、綺羅子さんののは女優養成所で、本式に稽古したんだから。」

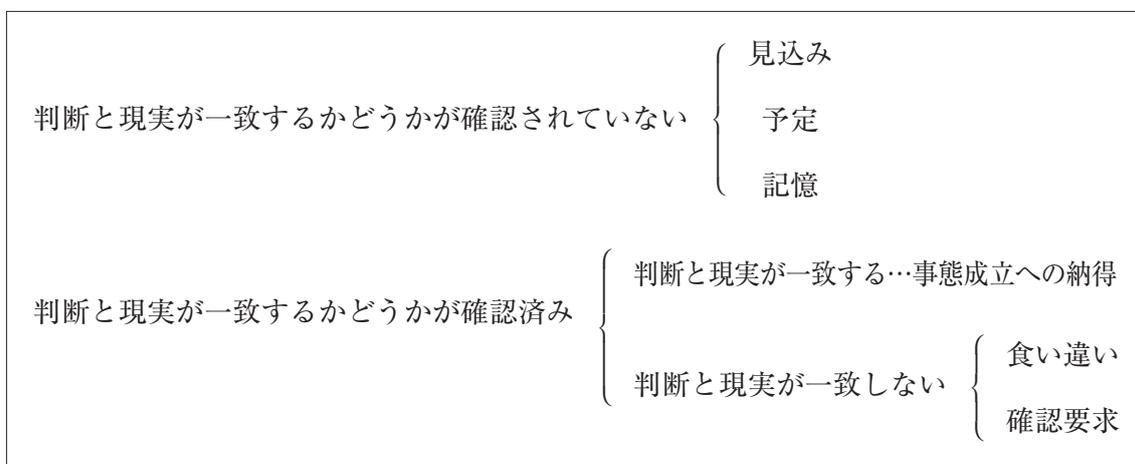


図1 ハズダの意味・用法

(『痴人の愛』)

(27) もう春だというのに、まだ一面に雪が積もっている。それもその筈、ここは北アルプスの山腹である。  
(『原本枕草子に操られたキツネとタヌキ』)

以上のように、「ハズダ」は〈話し手の判断〉と〈現実〉とに何らかの距離を持つ中で使用され、その〈判断〉と〈現実〉との関係によって3種類の用法として働くことがわかった。まとめてみると、次の図1となる。

## 2. ハズガナイとハズデハナイ

ハズダの否定には、内側の否定と外側の否定<sup>6)</sup>があり、ここでは、外の否定のハズガナイとハズデハナイを見ていく。

### 2.1 ハズガナイの意味・用法

ハズダの外の否定としては、ハズガナイが典型的なものである。本稿ではその基本的意味を「話し手の判断では当然成り立たない命題として提示する」ものだと規定する。ハズガナイには、ハズダと同じく、〈現実が確認されていない〉と〈現実が確認されている〉の二つの用法が存在する。例えば、

(28) こんな難しい問題は、小学生には分かるはずがない<sup>7)</sup>。

(29) そうでなかったら、こんな面倒なことを二年間も続けられたはずがない。

(『COBALT (コバルト)』)

のように、(28)は未来の出来事である「小学生に分かる」というのは、話し手の判断では決して成立しえないと主張しており、(29)の場合、過去の出来事である「こんな面倒なことを二年間も続けられた」という事柄が成立する可能性が皆無だと主張している。

ところで、「こんな難しい問題は、小学生には分かる」ということが成立する可能性が皆無だと主張することは、「こんな難しい問題は、小学生には分からない」という事態が確実に成立することを意味する。したがって、

(30) こんな難しい問題は、小学生には分からないはずだ。

のように、「小学生が分からない」という事柄が話し手の判断では成立する可能性が高いということを主張する場合とよく似ている。しかし、ハズガナイとナイハズダはいつでも無条件に言い換えられるわけではない。ハズガナイは、ハズによってその前の事柄をいったんまとめあげ、その存在を否定するものであり、ナイハズダは、ハズダという判断の本身に否定の要素が入っているものである。例えば、

(31a) しかし本当はどの程度まで嗅ぎつけたのか。アニタにはかつて一度も会ってい

<sup>6)</sup> 寺村 (1984) は、「ナイハズダ」と「ハズガナイ」との違いを述べるなかで、「一般的にいうと、「ナイハズダ」は、「ハズダ」というムードの形式が包み込んでいるコト、その陳述の素材となっている命題の否定、いわば「内側の」否定であり、「ハズガナイ」は、「ハズダ」というムード自体の否定、つまり、否定的なムード、「外側の」否定だといえるかと思う。前者を「propositional-negation」、後者を「Modal-negation」というふうにもいえるだろう。」(p271)と述べ、ハズガナイをハズダ自体の否定形として認めているようである。

<sup>7)</sup> 特に出典がない限り、用例は作例である。作例はすべて母語話者に文法性判断をチェックしてもらったものである。

ないはずだ。それは明瞭な事実だ。 (『エーゲ海に捧ぐ』)

(31b) \*アニタにはかつて一度も会っているはずがない。

(31a) では、「一度も」が「会っていない」にかかっているが、(31b) では「一度も」が「はずがない」にかかっているため、不自然な文になる。

一方、〈現実が確認されている〉のハズガナイについては、まず〈食い違い〉の用法として考えられるのは次の(32)である。

(32) (いつも不合格な彼が、期末テストで満点を取ったと聞いて) うそ? 彼が満点を取れるはずがないよ。

実際に彼は満点を取ったことが確認されている中で、「彼は満点を取ることはありえない」という話し手が頭の中で考えている判断を述べた場合、それは話し手の思った通りでない現実に対して、話し手は自分の判断の方に正当性を感じている。つまり、現実が確認されているにも関わらず、話し手の判断を持ち出すのは、その両者の食い違いに対する驚きや疑問などの気持ちが表されることになる。

また、〈さとり〉の否定として、高橋 (1975) が「～スルはずがなかった」だけを挙げている。それに対し、松木 (1994)、岡部 (2004) では、「～スルはずがない」には「さとり」の用法があると述べている。

(33) 先生自身の経験を持たない私は無論其処に気づく筈がなかった<sup>8)</sup>。(高橋 1975 : 81)

(34) これじゃ落ち着いて勉強できるはずがない。ひどい騒音だもの。(松木 1994 : 4)

(35) (まずいと評判の、客の来ないレストランの料理を実際に食べて) なるほど、この味じゃ、お客が来るはずがない。(岡部 2004 : 37)

岡部 (2004) では、(35)の場合、〈お客が来るか来ないか〉という現実について、話し手はすでに確認済みであり、〈お客が来ないことを知っている〉という点で、上の(実現可能性の否定)と異なっているという。話し手は、実際に料理を食べてみて〈お客が来る〉ということは自分の判断では決して成立しえないと今初めて認識し、それにより、現実〈店にお客が来ていない〉のは当然だと納得していると述べている。

現代書き言葉均衡コーパス<sup>9)</sup>で調べたところ、次のような例が見つかった。前後の文脈から考えると、(36)、(37)では、「さとり」の読みが可能になると思われる。

(36) むろん食物も食べるから毎日三〇〇〇カロリー近く食べていたことになる。これでは痩せるはずがない。太るのが当然である。(『なんとって「ショージ君」』)

(37) 冷蔵庫の中身も、たらの子・すじ子・つくだ煮というものでした。これでは食欲が出るはずがありません。体によいはずがありません。(『ケアワーク入門』)

また、ハズガナイが実際の運用では、「はず {が/は/も/φ} ない」といった形態の外、(38) あのとがわたしになにも告げることなく、去っていくはずなどない。

(『長編超伝奇小説』)

<sup>8)</sup> 〈さとり〉の時点はいつも現在であり、過去形になったりすることはできないと思われる。今回集めた用例を見る限りでは、実例のほとんどは〈可能性の否定〉であり、〈さとり〉としての例が見つからなかった。例を一つ挙げておく。

・熱力学の第一法則が発見されるまで無数の人がこれに類した永久機関を作るために生涯を費やしたが、無論できるはずがなかった。人間は、人口システムの管理は自分でやってきた。(『エコロジー的思考のすすめ』)

<sup>9)</sup> 少納言 <http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>

- (39) シャンパンに比べて安価に違いないヴァン・ムスーが、シャンパンよりうまいはずなんかないじゃないか。 (『ワイルド・ローズ』)
- (40) そんなはずはたしかにない。しかし、ここで見られることは、物言わぬけものにしてても世界の魔性を本能的に知覚するという事実である。 (『白鯨』)

と、ハズとナイの間に副助詞や副詞が入ることもあるなど、ハズの名詞としての性格が強く残っていることが言える。

以上、ハズガナイの意味・用法についてみてきた。図示すれば図2のようになる。

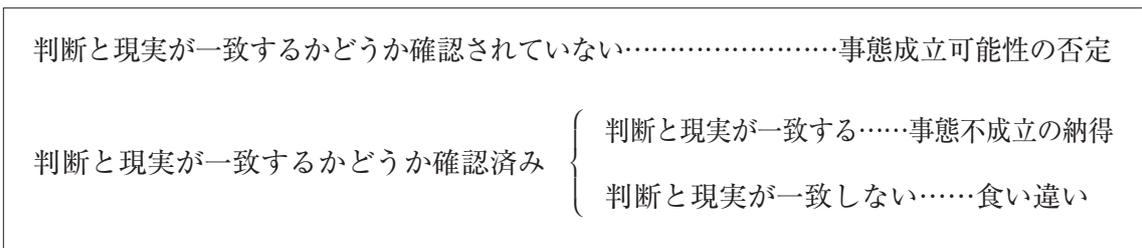


図2 ハズガナイの意味・用法

## 2.2 ハズデハナイの意味・用法

本稿では、ハズデハナイの基本的意味を、「確認された現実を命題として取り上げ、それは話し手の判断と異なる」ものだと規定する。例えば、

- (41) (起動スイッチを押しても起動しない機械を前にして)  
 おかしい。こんなはずじゃない。 (岡部 2004 : 40)
- (42) 「おい、どうしたんだ」と志摩が優しくきいてくれるのを待ったのだが、志摩は、なんの反応もみせなかった。こんなはずではないのである。  
 (『さきに愛ありて』)

また、ハズデハナイは、現実が確認された事柄について述べるものであり、結果が出てから発話していることが多いため、ハズデハナカッタという形で使われることが多い。このようなハズデハナカッタには次のような二つの用法があると思われる。まず、(43)~(47)は、〈予想との食い違い〉に分類できるものである。

- (43) —おかしい。こんなはずじゃなかったのに。  
 それからの展開も、予想外だった。 (『紅玉の火蜥蜴』)
- (44) 「こんなはずではなかったのに」と後で後悔しないためには、事前の検討を十分に行うことが大切です。 (『絵でわかる超入門原価計算』)
- (45) 浜の駐車場の小さいのに驚き、汽車の小さいのに驚き、銀座通りの家屋の低く粗末なのに驚いた。こんなはずではなかったという気がした。これはだれもよくいう事である。 (『柿の種』)
- (46) それが目的でここへ来たのではない。すくなくとも、そんなはずじゃなかった。  
 (『殴られてもブルース』)
- (47) 「今になってみると、よくここまで来たものだと思えてならないわ。私こうなるはずじゃなかったんですもの。自分の気持ちをはっきり見えるのよ。」庸三はその瞬間はっとした。 (『仮装人物』)

次の(48)と(49)は「予定との食い違い」に分類できるものである。

(48) しかし、誰にもそれとわかる一つの変化は意外に早くきた。大正九年五月十日の総選挙に、予想を裏切って楡基一郎は落選したのである。この年、選挙は行われるはずではなかった。新年早々新装なった壮麗な国技館、もはや雨天順延などということのなくなった国技館の機嫌を持った基一郎は、養子を未来の横綱として送りこんでいることもあって、上々の機嫌で客を招待したものだ。ところが片方では普選要求の声が激しくなっていた。普選を迫る民衆は演説会を開き、示威行進をし、衆議院、首相官邸に殺到した。この圧力に堪えかねた原内閣は、二月末、急転直下衆議院を解散したのである。 (『楡家の人びと』)

(49) 彼はまだそれほど強くなかった。だからまだ合宿に参加するはずではなかったという。けれど彼が自ら、合宿に参加したいと願いだしたのだ。 (『わたし革命』)

なお、(50)になると、〈予定〉とも〈予想〉とも読み取れる。

(50) 車夫は心得て駆け出した。今までと違って威勢があまり好過ぎると思ううちに、二人の俵は狭い横町を曲って、突然大きな門を潜った。自分があわてて、車夫を呼び留めようとした時、梶棒は既に玄関に横付になっていた。二人はどうする事も出来なかった。その上若い着飾った下女が案内に出たので、二人は遂に上るべく余儀なくされた。「こんな所へ来る筈じゃなかったんですが」と自分はつい言訳らしい事を云った。

(『行人』)

「来るところ」に関しては、自分の行く店なので予定していたと考えられるが、どのような店に来るかということは、車夫に任せになってしまい、それが期待どおりではなかったのである。望ましくない事態が生じたということがあると、〈予定〉は〈予想〉が外れたという意味に近づく。

すでに先行研究が指摘しているとおおり<sup>10)</sup>、ハズデハナイという形式は、「～はずではない」という形で使われることは少なく<sup>11)</sup>、多くの場合「～はずではなかった」という形で用いられる。現代書き言葉均衡コーパスで調べてみると、以下のような結果になる<sup>12)</sup>。ここでは、集めた用例を挙げることにする。

	用例数
ハズデハナイ (ハズジャナイを含め)	4
ハズデハナカッタ (ハズジャナッカタを含め)	50

<sup>10)</sup> 高橋 (1975) など。

<sup>11)</sup> ハズダの否定形として、ハズデハナイというのは可能な形であるが、実際には「こんなはずではない」の他、確認を求めないし反語的な表現にのみ使用されている。实例から見ると、これは結果的に肯定のハズダ (あるいはハズダロウ) に置き換えられるものと見てもよい。以下に例を挙げる。

・もうわたしには失うものなんか、なにもないはずじゃない。そうでしょ。(『フェティッシュ』)

・「えっじゃないわよ。敦己君は風邪を引いていたんでしょ。肉体は共有しているわけだから、あなたにも影響があるはずじゃない」(『網にかかった悪夢』)

<sup>12)</sup> 調査対象は書き言葉表現を中心としたものではあるが、ハズデハナイという形での使用が極めて少ないことが分かる。

- (51) 昭和三〇年代に結婚した当時は、明治生まれのしっかりとしたしゅうとめのもとで、嫁は一つの機械、働くものというような雰囲気、「こんなはずじゃない」という思いをずっともっていました。(『地域でとりくむみんなで育てる介護保険』)
- (52) ボールに手は当たらないし、当たったかと思えば変なところに飛んでいくし…本当はこんなはずじゃないのに！それなのに、サーブだけは妙に調子がいいとう矛盾w はい、4つ目。(Yahoo! ブログ / Yahoo! サービス / Yahoo! ブログ 2008)
- (53) 基本的に「文化が違う＝言葉が違う」ことを忘れずに。教職員のニーズをしっかりと聞き取ることが大切となる。着任当初はお互いに「こんなはずではない！」という思いを抱くことは多い。(『教師とカウンセラーのための学校心理臨床講座』)
- (54) 玄関から上がる。客部屋畳が積み上げてある。その畳を二枚、床板の上に敷いた。女はその上にあがって帯を解きはじめる。「どうぞ、あなたも」と言った。娘であるはずではない<sup>13)</sup>。もう二十歳を過ぎている。人の妻でもない。(『円四郎斬鬼剣』)

### 3. まとめ

以上のように、ハズガナイとハズデハナイの意味・用法について考察してみた。

考察の結果から見ると、ハズデハナイという形式は、形態上はハズダの否定形ではあるが、ハズデハナイという形で使われることは少なく、多くの場合は過去形のハズデハナカタという形で使われている。また、ハズデハナイは、「こんなはずでは(じゃ)ない」または、念押しや確認を求めるような反語用法に限られているようである。ハズガナイには、ハズダの語彙的意味から推測できる意味が認められるが、ハズデハナイになると、慣用的な用法が多くハズダの意味との関連性はあまり見られないので、ハズダとは異なる一種の独立した形式と考えたほうがよい。

一方、ハズガナイという形式はハズダとは形態上の対応を持っていないが、表1と表2で示されているように、ハズダの用法とある程度の対応関係をもっている。また、ハズダが「話し手の認識による判断では当然成り立つ命題」という基本的意味をもつものに対して、ハズガナイは「話し手の認識による判断では決して成立しえない命題」という基本的意味をもっている。この点から見ると、ハズガナイという形式は、意味・用法上ハズダの否定形として認めてもよいと思われる。

#### 参考文献

- 太田陽子 (2008) 「「運用力につながる文法記述」試論—モダリティ表現「ハズダ」の分析を通して」早稲田大学博士論文
- 岡部嘉幸 (2003) 「ハズダとニチガイナイについて—両者の置き換えの可否を中心に」『日本語科学』13: 109-122
- 岡部嘉幸 (2004) 「ハズガナイとハズデハナイについて」『中央学院大学人間・自然論叢』20: 31-48
- 奥田靖雄 (1993) 「「説明(その3) —はずだ—」」『ことばの科学』6: 179-211
- 高橋太郎 (1975) 「「はずがない」と「はずじゃない」」『言語生活』289: 79-81
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 森山卓郎／仁田義雄／工藤浩 (2000) 『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店

<sup>13)</sup> (54)は(51)～(53)のようなものとは異なり、かなり特殊な例として挙げておく。

- 松木正恵（1994）「「～はずだった」と「～はずがない」—過去形・否定形と話者の視点」『学術研究  
国語・国文学編』42：1-14 早稲田大学  
森田良行（1980）『基礎日本語2』角川書店

用例出典

新潮文庫 100 冊 CDROM

石川達三『洒落た関係』

石川達三『青春の蹉跎』

大岡昇平『野火』

三浦綾子『道ありき』

武者小路実篤『愛と死』

宮本百合子『播州平野』

安部公房『砂の女』

安部公房『闖入者』

夏目漱石『行人』

夏目漱石『ころも』

藤原審爾『さきに愛ありて』

北杜夫『楡家の人びと』

徳田秋声『仮装人物』

国立国語研究所 現代書き言葉均衡コーパス少納言 BCCWJ

<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>

福沢諭『誰も描けなかったピナたちの物語』

白井喬二『南総里見八犬伝：現代語訳』

いしいしんじ『白の鳥と黒の鳥』

乙一『失はれる物語』

鈴木光司『らせん』

田中菊雄『英語研究者のために』

佐々木譲『ストックホルムの密使』

丘修三／石井睦美『おめでとうがいっぱい』

清水節『ラストコンサート』

須坂蒼『薔薇の契約』

橘香いくの『迷宮の記憶』

出久根達郎『犬と歩けば』

麻生玲子『眠る体温』

伊丹十三『女たちよ！』

松定ちよし『原本枕草子に採られたキツネとタヌキ』

池田満寿夫『エーゲ海に捧ぐ』

杉江久美子『COBALT（コバルト）』2003年8月号

立花隆『エコロジー的思考のすすめ』

東海林さだお『なんたって「ショージ君」』

佐藤禮子／馬場良子『ケアワーク入門』

篠田真由美『長編超伝奇小説』

藤原万璃子『ワイルド・ローズ』

ハーマン・メルヴィル／八木敏雄『白鯨』

小林満州子『地域でとりくむみんなで育てる介護保険』

前田由紀子『教師とカウンセラーのための学校心理臨床講座』

秋月涼介『紅玉の火蜥蜴』

小川正樹『絵でわかる超入門原価計算』

寺田寅彦『柿の種』

スティーヴン・ウォマック／大谷豪見『殴られてもブルース』

有森裕子『わたし革命』

西澤保彦『フェティッシュ』  
愛川晶『網にかかった悪夢』  
峰隆一郎『円四郎斬鬼剣』